宮川健郎　私の出会った児童文学者たち　第 15 回
第５章　古田足日先生
その１　『現代児童文学論』

ことし（2024 年）は、古田足日・田畑精一の絵本『おしいれのぼうけん』（童心社 1974 年）の刊行 50 周年にあたる。私が古田足日先生（1927～2014 年）に出会ったのは、『おしいれのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は 19 歳だった。

「没後 10 年　古田足日のぼうけん」最終日

2024（令和 6）年９月 29 日は、神奈川近代文学館の企画展「没後 10 年　古田足日のぼうけん」の最終日だった。８月 10 日にはじまった、この企画展の編集委員をつとめたのは、佐藤宗子さんと私だ。展示会場に行ったのは、この日で３回めだった。

企画展の特に大きな目玉は二つあったと思う。一つは、会場入口近くのケースに展示された『おしいれのぼうけん』の草稿類。もう一つは、「初期評論」のコーナーに展示された、早大童話会の「「少年文学」の旗の下に！」（『少年文学』1953 年 9 月）の草稿である。昨年、古田先生のご遺族から神奈川近代文学館にまとまった量の資料が寄贈されたのだが、いずれも、そのなかから発見された。

この日、私は、まず、会場のどんどん奥へと入っていって、「初期評論」のところへ行った。

> 科学は常識によってさえぎられ、変革は権力によってはばまれる。発展と進歩の芽生えるところ、古きものは常に全力をあげてその歯車の前進をさまたげた。だが同時に、勝利は常に新しきものの側にかがやく。これは歴史の宿命であり、必然であった。
>
> いまここに、新しきもの、変革をめざすものが生まれた。「少年文学」の誕生、すなわちこれである。

このように書き出された「「少年文学」の旗の下に！」は、「少年文学宣言」とも呼ばれる。早稲田の学生時代の鳥越信（1929～2013 年）の起草だといわれてきたが（注１）、そこに記されているのは、ほんとうに鳥越先生の手による文字だ。鳥越信、古田足日、それに鈴木実さん（1932 年～）もくわわって、議論しながら推敲したあとが残っている。「我々」は「メルヘン」を「生活童話」を「無国籍童話」を「少年少女読物」を克服して「少年文学」をめざすとした、1300 字ほどの「宣言」は、日本の子どもの文学が大きく変わるきっかけを作った。

私は、なぜか世界思想社の原稿用紙に書かれた「宣言」の草稿を、目に焼きつけるように、しばらくにらんだ。そのあと、もう一度、会場入口にもどって、ひととおり、ゆっくり見て、それでも、１時間ほどで会場を出た。文学館の外はまだまだ暑かったけれど、午後の日差しのなか、元町・中華街駅への急坂を降りていった。

夜の電話

1975（昭和 50）年、私は、日本児童文学者協会が主催した日本児童文学学校「第２期批評・評論教室」を受講した。大学１年生がおわる春休みから夏のはじめにか

けての全８回の講座だった。

大学の文学部に入学して、何か文学に関わる仕事をしたい、あるいは研究みたいなこともしてみたいと思っていた。何をやるか、私のなかに、いくつか候補があったけれども、児童文学は候補ではなかった。母宮川ひろが『るすばん先生』（ポプラ社 1969 年）でデビューして、もう５、６年たっていたから、母と同じ分野に進むわけにもいかないだろうと考えていた。ただ、子どもの本をたくさん読んできたから、子ども時代と別れるというような、そういうつもりで受講しようと思った。これから何をするにしても、ほかの分野にも役立つことが聞けるだろうとも思って参加することにしたのだ。

「評論教室」には入学試験があった。作文を提出しなければならなかった。「なぜ児童文学批評をめざすか」というテーマがあたえられていたのだが、原稿用紙に、当時のことだから、もちろん手書きで７枚書いて送った。町でコピーが簡単にとれるようになる、ちょっと前の時代だったから、書き上げた原稿をそのまま送って、手もとには残っていない。でも、一生懸命書いたから、内容はだいたいおぼえている。

まず、自分も子どもの本を読んできたけれども、子ども読者の立場で考えるようなこと、「読者論」が必要ではないかと書いた。それから、子どもの本という分野のなかだけではなく、広く近現代の文学のなかで考えたいとか、批評というものがやはり一つの作品として成り立つべきではないかとか、三つくらいのことを主に書いて送った。

多くの応募があったはずではないから、作文で入学試験に落ちるということはなかった。１回めの日が来たら行けばいいだけだった。しかし、あらかじめ、それを出すことが義務づけられていたのだ。

２月の土曜日が１回めだったが、その前の木曜日だったと思う。夜、家にいたら、７時半すぎに電話がかかってきて、私が出た。男性が「宮川健郎くんいますか」とおっしゃるので、「はい、私です」というと、「古田足日です」という。古田先生は、「君の作文読みました」といって話しはじめた。「評論教室」の入学試験の作文には、住所や電話番号も書きそえてあった。「教室」の主任教授格で、めんどうを見てくださったのは古田足日先生だった。50 歳より少し前だった。

電話のむこうの古田先生の手もとには私の作文があるらしく、それを引用しながら、ずっと意見をいってくださった。15 分くらい、いろいろ述べてくださるのを、私は、ただ聞いていた。おしまいに「待っているから来なさい」とおっしゃって、電話がおわった。小学生のころから、古田足日の作品を読んでいた。好きな作品もあったし、大学生になってから、先生の評論もいくらか読んでいた。私は、古田足日に自分のことばが届いたような気がして、すっかり興奮した。

「教室」がはじまるまでの２日間、私は、眠れなかった。当日、ようやく行って、そのころ、ほんとうに忙しかった古田先生は最初から遅刻してきたのだが、受講生８人だけの「教室」がはじまったのだ。

小学生時代の読書

小学生のころから、古田足日の作品を読んでいたと書いた。私の小学生時代の読書に関して、少し記しておくことにする。ここでまた、母が登場する。

1964（昭和 39）年だったかと思う。ある土曜日の夕方、母が帰宅して、ドアを開

けるなり、出迎えた小学３年生の私に、大きな声でこういったのだ。――「あのねえ、名作は、だめなんだって。」

後年、確認したのだが、母は、この日、柳内達雄さんの講演を聞いたらしい。柳内達雄（1911～78 年）は、もともとは青山師範卒の綴方教師で、教育評論家。東京都教育研究所・三鷹分室の子ども図書館「山本有三青少年文庫」での読書指導でも知られる。

母は、1963（昭和 38）年６月から、毎月１回、１年間１度も休まずに、東京都武蔵野市の聖徳学園で行われた「子どもをめぐる文化教室」に参加していたのだが（この連載の第１回参照）、このときの講師のひとりが柳内さんだったのではないかと推測している。これも半ば推測だが、柳内さんは、完訳ではない名作再話の問題点を指摘し、1959（昭和 34）年に出発したと考えられる日本の現代児童文学の作品を紹介したのではないか。

母は、柳内さんのお話に感銘をうけたのだろう。「名作はだめなんだって」といって、毎月１冊、偕成社版の『児童世界文学全集』を買ってくれていたのを途中で打ち切り、日本の新しい創作児童文学を買ったり、借りたりして、私に手わたすようになった。だから、私は、小学生のうちに、佐藤さとる『だれも知らない小さな国』（講談社 1959 年）も、いぬいとみこ『木かげの家の小人たち』（中央公論社 1959 年）も、松谷みよ子『龍の子太郎』（講談社 1960 年）も読み、現代児童文学の最初の読者の世代のひとりになったのである。このころに、古田足日『ぬすまれた町』（理論社 1961 年）や『宿題ひきうけ株式会社』（理論社 1966 年）も読んだのだ。

1975 年の手帳から

「評論教室」に話をもどす。

『日本児童文学』1975 年１月号に第２期の開講の案内がのっている。――「批評・評論をさかんにするために、第二期の批評・評論教室を少数精鋭の取り組みで開きます。第一期の受講生の方々は、現在、協会機関誌「日本児童文学」その他に執筆、活躍しています。」1970 年代は、子どもの数が多く、子どもの本がよく売れた時代だった。古田足日先生は、こうした時代にこそ、批評・評論が必要だと切実に思われたにちがいない。先生は、1960 年代になって本格的に創作活動をはじめる前、50 年代は、「少年文学宣言」を深める文章をつぎつぎに書いていった評論家だった。その後も、創作とともに評論を書きつづけた。

案内には、定員は 20 名、受講料は１万円と書いてある。受講料は、母に頼んで出してもらったのではなかったか。その春休みには、知り合いのオフィスでアルバイトもしたのだが。

第２期の「評論教室」は、どんなカリキュラムだったのか。手もとに残っている、私の 1975（昭和 50）年の手帳から、「教室」に関するメモを抜き出して整理してみる。

日本児童文学者協会主催　日本児童文学学校「第２期批評・評論教室」

・第１回　1975 年２月 15 日（土曜、毎回土曜日開催）
　（オリエンテーション）（講義）「児童文学批評とは何か」（講師　古田足日、砂田弘、大岡秀明）

・第２回　３月１日

（講義）「日本児童文学評論史１…明治・大正」（講師　菅忠道、長谷川潮）

・第３回　３月 15 日
（演習）作品論『でんでんむしの競馬』『木かげの家の小人たち』（講師　古田、砂田、大岡）（それぞれが持ちよった、いずれかの作品にかんする批評の実作指導。）

・第４回　３月 29 日
（講義）「日本児童文学評論史２…昭和」（講師　鳥越信、長谷川）

・第５回　４月 12 日
（講義）「児童文学の中の子ども」（講師　安藤美紀夫、長谷川）

・第６回　４月 26 日
（講義）「私の批評の方法」（講師　小西正保、西本鶏介、細谷建治）

・第７回　５月 17 日
（演習）「作品論」（講師　古田、砂田、大岡）（５月８日締め切りで、それぞれが提出した作品論の実作指導。）

・第８回　６月 28 日
（演習）（講師　古田、大岡）（この回の内容についてはメモがないが、実作指導だったと思われる。）

「評論教室」は、毎回、当時、新宿区百人町にあった協会の事務所で行われた。「メゾン吉田」という３階建ての２階の１ＬＤＫが事務局で、ドアを開けたところの板の間に事務机がいくつかあり、その奥の本棚にぐるりと囲まれた和室が「教室」だった。はじまりは、いつも午後１時 30 分。

はじめのころは講義が多かったが、やがて、児童文学作品についてのまとまった文章を提出して指導をしてもらう演習が中心になっていく。400 字で 10 枚以上書く課題がつづいたせいか、８人いた受講生は、間もなく３人にへってしまった。大学４年生の女性のＹさん、専業主婦だといっていたＴさん、それに私だ。受講生より講師のほうが多いような日もあった。古田先生は、自分の担当回でなくても、いらっしゃることもあったと思う。

講師の先生たちは、児童文学の現在と未来について、熱心に、また実に楽しそうに語り、この先生たちが、こんなにも心をかたむけている児童文学とは、たしかに取り組む意味があるのだと、19 歳の私に思わせた。

評論教室から評論研へ

「評論教室」の最終回がおわった 1975 年６月 28 日の夕方、私たちがいた協会の事務所に、「教室」の１期生（第１期は日本児童文学学校「批評・評論特別教室」として 1973 年 11 月～74 年２月に７回開講）である細谷建治と天野悦子、それから、「評論教室」とは別の場所で古田先生に出会った藤田のぼるがやってきた。（注２）そして、いま、第２期の「教室」を修了したばかりの私たち３人をまきこんで、「児童文学評論研究会」という勉強会が結成された。そのときにもう、第１回を行い、細谷、天野、藤田がレポーターで、テーマは「70 年代日本児童文学の動向をさぐる」、資料は『日本児童文学』1975 年６月号の特集「現代児童文学への八つの問い」だった。「評論研」は、現在まで活動をつづけている。例会は、今月（2024 年

11 月）で第 592 回になる。

細谷建治は「教室」の第６回の講師のひとりだったから、会うのは２回めだったけれど、天野悦子と藤田のぼるは初対面だった。３人とも、すでに、前の年の『日本児童文学』1974 年 11 月号の特集「現代児童文学の出発点」に執筆していた。（注３）

細谷建治は、評論研結成の夕方のことをこう書いている。評論研 100 回記念誌『批評へ』（1983 年 11 月）に寄せられた長文の「飛べない鳥たちの騒めき―評論研 100 回をふりかえって―」の一節である。（注４）

> 藤田のぼるは「最後まで決着をつけるような討論の場がほしい」といった。その言葉は、今でもぼくの胸の中に残っている。そして、八年半もつづけてきながら、今だに何ひとつとして「決着」をつけられていない自分に気づき、年の重みにただがく然とする。ともかくも、その日は、まだ未成年だった宮川健郎にビール券をもたせて、使い走りをさせ、ぼくらは祝杯をあげた。

ビール券をもって走った、このとき、私のなかで大きなとびらが開いたような気がする。とうとう、「人生」がはじまってしまったというような夕暮れだった。

先ほどの 1975 年の手帳には、第１回例会の出席者の名前が書き留められている。上記の細谷、天野、藤田、第２期「評論教室」修了生のＹさん、Ｔさん、私。協会の事務局員３人もくわわった。霜村三二さん、小此鬼則子さん、池田陽一さん、事務局員は、みな大学を出て間もない 20 代だった。（注５）古田先生も砂田弘先生も参加した。「評論教室」最終回のあと、講師の古田先生はそのまま残り、大岡秀明さんは立ち去った。大岡さんと入れ替わりに砂田弘先生がやってきた。第１回例会の出席者は、11 人ということになる。

細谷建治が「評論研」の代表をつとめることになり、私が事務局を引きうけた。私の事務局は、1980（昭和 55）年３月の第 57 回例会までつづく。私より９歳年長とはいえ、細谷は 28 歳、藤田のぼるも 25 歳の若者だった。（注６）このあと、しばらく、「評論研」が私のおもな活動、勉強の場所になっていく。

「さよなら未明」

「評論教室」全８回がおわったけれど、同時に「評論研」がはじまって、その会場は、やはり、日本児童文学者協会の事務所だったから、私は、引きつづき、事務所に行くことになった。そして、大学の夏休みがはじまった７月中ごろからは、協会事務局のアルバイトとして働くことにもなったのである。

当時、協会は、毎年夏休みに、300 人ほども参加者ある、２泊３日の大きな講座を催していた。1975 年８月は、熱海市の旅館で「第９回幼児教育と幼年文学夏期講座」が行われ、私は、その準備を手伝うアルバイトとして、毎日のように協会に通った。

75 年は、東京での準備だけで、現地には行かなかったのだが、翌年の 76（昭和 51）年７月、茨城県潮来市のホテルでの「児童文学夏のゼミナール・第１回潮来」のときは、現地でも働き、ときどき、分科会をのぞいたりした。

このときには、古田足日の第一評論集『現代児童文学論―近代童話批判―』（くろしお出版 1959 年）を持ち歩いていた。私はもう、すっかり児童文学の批評や研

究の道に進もうと決心していた。そうすると、「現代児童文学」をつくった古田足日の評論が読めなければ、日本児童文学の過去も現在もわからないと思ったのだが、『現代児童文学論』は、なかなかむずかしかった。

私の手に入れたのは、この本の第４刷だったが、1966（昭和 41）の第２刷からは、カバーの裏表紙側に、重版にあたっての著者のことばが記されている。一部引用する。

> 「さよなら、未明」は、はじめ「未明との訣別」であったのを「訣」が当用漢字にないので、「さよなら、未明」になった。（中略）「さよなら、未明」は、「くたばれ、未明」でもなければ、「未明をやっつけろ」でもない。「訣別」の辞書の説明が示すように、近代童話へのいとまごいであり、新しい出発の別れであった。

『現代児童文学論』の巻頭に、書き下ろしの「さよなら未明―日本近代童話の本質―」が掲載されている。「童話イコール児童文学という錯覚ほどおそろしいものはない。（中略）その（小川未明にはじまる近代童話の―宮川注）性格はひと口にいえば、近代人の心によみがえった呪術・呪文とその堕落としての自己満足である。」という書き出しの「さよなら未明」にずいぶん心ひかれたが、それは、ずいぶん読みにくく、むずかしかった。

潮来での「ゼミナール」の夜、私は、ホテルの廊下で古田先生をつかまえて、「さよなら未明」のページを開いて、「先生、ここがよくわかりません」と聞いたことをおぼえている。この評論の２節で、未明の「赤い蝋燭と人魚」の冒頭を引いて批判をくわえていくくだりだ。切羽詰まってお聞きしたのだけれど、先生は、「まあ、若いころの文章だからね。わかりにくいだろうね」とおっしゃって、少し笑った。そのころ 49 歳だった先生が 32 歳のときに発表したものではある。特に説明してくださらなかったことに、私は、がっかりしたけれど、同時に、ああ、説明はしてもらえないものなんだな、自分で考えなければならないんだなと思った。

（注）

１、たとえば、座談会形式の尾崎秀樹・西郷竹彦・鳥越信・宗武朝子『子どもの本の百年史』（明治図書 1973 年）の第 17 章「「少年文学宣言」をめぐって」のなかで、鳥越自身が「あの原案は一応ぼくが書いたんだ。」といっている。

２、藤田のぼるは、子どもの文化研究所が主催する講座で古田足日と最初に出会ったと、藤田本人から聞いている。

３、天野悦子「「だれも知らない小さな国」に関して」、藤田のぼる「「赤毛のポチ」のリアリズム」、細谷建治「「龍の子太郎」の発想」が掲載されている。特集のはじめには、大岡秀明が「「現代児童文学作家論」への試み」を執筆している。

４、細谷建治「飛べない鳥たちの騒めき」は、第２期の「評論教室」の最終日に「ぼくらがおしかけたとき」の第０回評論研、つまり設立準備の会の日のこととして以下を書いている。その後、６月 28 日に第１回評論研が行われたと述べているが、今回参照した私の手帳によれば、６月 28 日が私たちの「評論教室」修了日であり、第１回評論研開催日ということになる。細谷の記述は、不正確だと思われる。

５、霜村三二さんは、20 代がおわるころに、埼玉県朝霞市の小学校教諭となり、

定年までつとめた。教育実践をまとめた著書に『らぶれたあ』(かもがわ出版 2006 年）がある。小此鬼さんは、林則子さんの旧姓。編集プロダクション恒人社所属の、その後はフリーの編集者として活動した。『神沢利子コレクション』全５巻（あかね書房 1994 年）など、多くの仕事がある。2003（平成 15）年に病気で亡くなった。53 歳。一周忌に、林則子さんの本刊行会による追悼集『林則子さんの本』が刊行された。池田陽一さんは、その後、童心社勤務、のちに編集長。『全集　古田足日子どもの本』全 13 巻・別巻 1（童心社 1993 年）の編集責任者だった。

６、『細谷建治児童文学論集』Ⅱ『町かどをまがるとゴジラがいる』(てらいんく 2019 年）の巻末に私が書いた解説「批評の季節に」にも「評論研」のはじまりにふれた。そこで、「私より十歳年長とはいえ、細谷は三〇歳、藤田のぼるも二六歳の若者だった。」としたのは、あやまり。おわびして、訂正します。同じ解説で、第 1 回評論研のときに細谷とはじめて会ったと記しているが、上記が事実なので、これも、まちがい。あわせて訂正します。

（付記） 宮川健郎「児童文学研究とは何をすることか」(『武蔵野文学館紀要』2022 年 3 月)、宮川「批評の季節に」(『細谷建治児童文学論集』Ⅱ、前掲所収)、宮川「子ども読者と媒介する大人たち―『子どもの文化』の『赤い鳥』100 年―」(『子どもの文化』2019 年 3 月）と少しずつ内容が重複する部分があることをおことわりします。